
俺の彼女はポケモン

杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の彼女はポケモン

【Nコード】

N0009Y

【作者名】

杏

【あらすじ】

イッシュを救って約5年、ほぼ最強のトレーナーになったリーフ、彼女がアルセウス（テラ）という恐ろしいことに、モスギスは全然変わってない、幼馴染のカイセー（D・P・Pの主人公）と激突、謎のBH団とWHが襲来、アルタイル要素全開するかも？ ＊なおこの作品はリーフブレードの続編です。

人物紹介

アロマ・リーフ・ハルモニア 性別..男(女子にしか見えないが...)

出身地 カノコタウン

手持ち

シャンデラ(♀) 特性..影踏み

ジャノビー(♂) 特性..天邪鬼
あまのじやく

ディザゾル(♀) 特性..強運

コジョンド(♀) 特性..捨身

ウォーグル(♂) 特性..力尽く

チラチーノ(♀) 特性..テクニシャン

パルキア(♂) 特性..天の恵み

ミロカロス(♀) 特性..マルチスケイル

*

赤井 レッド はじめ — 春性別..男

→名前はレッドと読まないでください、分かりやすくするためです、

出身地 マサラタウン

手持ち

ピカチュウ (♂) 特性.. 静電気

ミュウツー (♂) 特性.. 緊張感

ドレディア (♀) 特性.. マイペース

カビゴン (♂) 特性.. 厚い脂肪

ラプラス (♀) 特性.. 貯水

ファイヤー (♂) 特性.. 炎の体

*

アル・テラ・セウスII テラ・アルセウス 性別.. 女

出身地 ????

人物紹介（後書き）

多分後から追加するわ・・・

プロローグ（前書き）

リーフブの続編です！

プロローグ

「あ、もうすぐですね。」

案内してるような彼の名前はリーフ、

銀次郎の帽子をかぶって髪の色は緑で髪型は三つ編み？

もはや女性にしか見えない 歳は20歳前後である、

「お、水面シテイミナモか。」

そう言う彼の名前は赤井、歳は30代である、

「うーん、コンテスト初めてだなあ。」

心配そうに言う彼女の名前の名前はテラ（アルセウス）

：ようにアルセウスを擬人化したものと思ってい、

歳は、：わからない、

場所は豊艶地方、

時は巨大隕石落下からかなり経っている、

「大丈夫だよ。」

「うん、頑張る！」

俺は邪魔か？ と思っていた赤井だった、

彼らは水面シテイに着いた、

そこでは騒ぎが起きていた、

「わー!」「きゃー!」「助けてー!」

「おい! 何か暴れてるのか? 言ってみよう!」
「はい!」

三人は砂浜に行った、

そこにはオノノクスがサーフィンしてる光景だった、

そこにジュンサーと複数の住民が来た、
ジュンサーがメガホンで言った、

「そのオノノクス! 今すぐサーフィンを止めなさい!」

しかしオノノクスは気にせずサーフィンを続ける、
何度も言ったがいうことを聞かなかった、

「こうなったらランクルス! サイコショック!」

「「え。」」

赤井とテラが言う、

「止めろー! シャンデラ! シャドーボール!」

リーフのシャンデラがサイコショックをしようとしたランクルスに
攻撃をする、

「何するんですか! あなたを逮捕しますよ!」

「はああ!? あなたが攻撃しようとしたのが悪いんでしょうが!」

「:あいつあんなに強気だったっけ。」

「さあ・・・。」

「わかりました、止めてくださいよ!」
「わかりました!」

するとリーフがウォーグルを出した、
オノノクスをわしずかみにして砂浜まで運んだ、
オノノクスは呆然としている、

ジュンサーも呆然としている、

「・・・ご協力ありがとうございました。」

「いえいえ、このオノノクスは俺が引き取ります。」

「はい、わかりました。」

そう言ってジュンサーと住民は去って行った、

「:さあ、俺たちはコンテスト会場に行くか。」

「はい。」

こうして彼らはコンテスト会場に向かった、

第1話 いざいざ

プルルルルルル・・・・・・・・

赤井の携帯電話が鳴った、

「あ、俺の電話だわ、ちょっと出てくる。」

「はい、わかりました。」

「もしもし・・・・・・・・はい・・・・・・・・わかった。」

ピッ

「で、何だったんですか？」

「ああ、どうやら『ここ』のチャンピオンに呼ばれたようだ、しばらくお別れだな。」

「え、はい、わかりました、さようなら。」

「じゃあな。」

赤井はファイヤーの乗って去った、

「・・・・・・・・そーいやあテラはあの時期だったな。」

「うん、また来るね。」

「おう。」

スツツとテラが消えた、

「……………って俺一人かよ!?　しょうがない、コンテストの受付を済ませるか。」

＊

コンテスト会場の前に一人の女性が立っていた、

「あ、あのー、何かあったんでしょうか。」

「えー、ちょっとトラブルがね。」

「そうですか、さようなら。」

リーフは笑顔で去った、

「ふうう……………」

「ト、オトナシクカエルトデモオモツタカ？」

「キャッ！」

「キャッ！　じゃねえ！　まず服が普段着すぎるだろ！　後ろで受付してるの见えてるし！」

「あちゃー、じゃ、どうぞ。」

「どうも。」

リーフがさりげなく通ろうとすると、

「あ！　やっぱだめ！」

「何だよ！」

そこに一人の男がやってきた、

「おい！　青木^{ブルー}い！　何やってんだよ！」

緑山が怒る、

「あ、緑山^{グリーン}さん。」

「おう！　久しぶりだな！」

「もー、邪魔する邪魔しないでよ。」

「……っ邪魔してんじゃねーか！」

青木と緑山がコンテスト会場の前で喧嘩を始める、
周りは騒ぎ出した、

「あ、あのゝ・・・・・・・・・・。」

「だから！ こいつの邪魔だけはするな！」

「強いから出ちゃだめなのよ！」

「・・・・・・・・・・、こおーんにーちわあー!!?!?!」

「ん？ あ、わりいわりい、先に行つてろ。」

「はい。」

リーフはコンテスト会場に入って受付を済ませたのであった、

第2話 親友

現在リーフ他コンテスト出場者複数がいる控室にいる、

新王にいた頃の幼馴染と再会して仲よく話してるようだ、
カイセー

「え、あの時って勝ったんじゃないの？」

「違うよ、ただ楽しいバトルがしたかっただけみたいだよ？」

そんな感じで昔話に花を咲かせていた、

＊

コンテストが始まった、

リーフの知ってる人では、

カイセー、春川、モスギス、ジョージ、ホワイトとか、

リーフとは面識がないが桃木一（ダイパ女主人公）サトシは出てないか、

彼らは難なく一次試験を突破した、

＊

控室、

「ジョージ？ 一緒の突破できたね。」

モスギスがまたジョージに絡む、ジョージは嫌がってるが、

「うわっ！ こっちくんな！」

「もうっ！ ツンデレなんだからー。」

「「あはははははは・・・・・・」」

リーフとカイセーは苦笑いをした、

誰かモスギスを止める人はいないのかと祈って、

結局祈りは通じなかったが・・・

＊

ついに2次試験が始まった、

一回戦、

桃木VSジョージ

春川VSカイセー

リーフVSホワイト

モスギスはこのストーリーとは関係ない人とバトルなのでカット、

第3話 ジョージ 必死の抵抗（前書き）

このタイミングでコンテストか、

リーフ

「おい、タイミング間違ってるぞ、せめてあのリメイクが出てからにしろや。」

もう書いちゃったもん！ 今更消すかー！

リーフ

「じゃあ予約投稿で・・・・・・・・・・。」

もういいじゃねえかよ！ とりあえず投稿するね！

第3話 ジョージ 必死の抵抗

最初の2次予選最初の戦いは桃木選手対ジョージ選手です！

「俺はジョージじゃねえ！

一瞬会場が凍りついた、ジョージが汗って言った、

あ！俺はジョージだった！くそー、いつもの癖でやっちゃまったぜ。」

「そ、そうなんですか……。」

桃木が苦笑いする、

バトルが始まると同時に会場は一気に盛り上がった、

ジョージはバジリールとファマインを出した、

桃木はマンムーとトゲキッスを出した

「俺からいかせてもらうぜ！バジリール！幻惑粉！ファマイン！熱風！」

とても怪しい粉に加え暑い風が二匹に襲い掛かる、早速桃木の点が少し下がった、

「やるわね、トゲツキス！ エアスラッシュ！
マンムー！ 吹雪！」

吹雪とエアスラッシュが合わさってまるで嵐のような猛吹雪がぶつかる、

桃木側のほうが圧倒的に威力が高く完全にジョージ側が押されている、

「うお！ なんじゃこりゃあ！！ くそー！ どっちもピッカリ玉だ！」

突然バリジールとファマインが光だした、

その隙にバリジールは桃木のポケモンに幻惑粉をかけた、
ファマインは鬼火をした、

桃木のポイントはどんどん下がる、
会場はさらに盛り上がる、

＊

控室、

「すげえ、流石ジョージさんやるなあ。」
「ほんとだ、あの桃木を圧倒してるぜ。」

リーフはのんきに言う、

カイセーはかなり驚いている、

＊

会場、

かなりのダメージを受けてマンムーとトゲキッスは目が覚めた、

「・・・・・・・・ここからが私達の逆襲よ！ マンムー！ 地震！
トゲキッス！ 大文字！」

「そんなも・・・・・・・・うわぁ！ 大丈夫か！ ファマイン！
バリジール！」

一気に形勢逆転、ジョージ側は追い詰められた、

「くそー、これで最後みたいだな、だがまだ俺達には最後の切り札

がある！

バリジール！ ハードプラント！ ファマイン！ 怒りの炎！」

桃木側にとてつもない攻撃が襲い掛かる、
周りは完全に桃木の負けだと思っていた、

「マンムー！ トゲキッス！ あのコンビネーションを今使うのよ
！」

マンムーとトゲキッスは小さくうなずき、
何かの準備を始めた、

「マンムー！ あられ！ トゲキッス！ 空を飛ぶ！」

ジョージ側のポケモンは一気に視界が悪くなった、
トゲキッスは高い場所にいるため自由に攻撃ができる、
マンムーは特性の雪隠れで回避、

「とどめよ！ トゲキッス！ 大文字！ マンムー！ 吹雪！」

ジョージのポケモンは倒れた、

勝者！ 桃木選手です！

「うお……流石だぜ、完敗だ。」

「いい勝負でしたね、またいつか勝負しましょう。」
「おう！」

第3話 ジョージ 必死の抵抗（後書き）

モスギス

「いやーん、なんでジョージを負けさせちゃったのさー!」

ん？ まあ、そういうこと、

モスギス

「なにも言っていないでやんすよ。」

しらん、とりあえずこのへんで、
また会おう！

ちょっとサイドストーリー

赤井は豊艶のチャンピオンに呼ばれてリーグ本部にやってきた、

「・・・・・・・・きましたね、赤井さん。」

「緑流、何の用だ。」

周りは会社の社長の部屋の様な感じだが
どこか重苦しいふいんきがある、

「失礼しまーす！ お！ 赤井さん！ 久しぶり！」

能天気な声で来たのは一銀次郎（H G S S 主人公）、

「ああ、久しぶり、銀次郎もか。」

「さんなんですよ、俺もよばれたんだよ。」

「ん？ 1人称変わってる？」

「そうなんだよ、僕が似合わないとかいわれてさ・・・・・・・・

話しはしばらく続いた、

「・・・・・・・・なんだよ。」

「そうなのか・・・・、まあ、青木は間違っていないと思うぞな。」

そして緑流が話しを切り出した、

「話しはそこまでにしてももらえませんか？ 大事な事なので。」

「そうか、分かった。」

「おう！」

赤井はさらにこの部屋の空気が重くなったと感じた、
銀次郎は何も感じてない様だが、

「赤井さん、あなたを再逮捕します。」

部屋が一気の凍りついた、
流石の銀次郎も能天気ではいられなくなった、

「な！？ 俺は何もしてないっ！」

「アホかお前はーーーー！！！！！」

銀次郎が怒鳴り声を上げる、
赤井はかなり動揺している、

「いえ、僕は反対したんです、まあ、リーグの会議で。」

＊

数日前、

各地地方リーグ会議、

「私は赤井君がリーフを利用して……………」

白奈がいきなりとんでもない提案を出した、

「……………」

「何言ってるのじゃオラァ！！！！　息子が利用されるほど幼稚ではない！」

プラント―（リーフの父親）が本気で怒る、ただでさえ温厚な人だが……………」

そして緑流も意見を言った、

「僕も反対です、逆にリーフさんが暴れ出したら手が付けられないと思うんです、

プラントさんでも勝てないというのに……………」

元旦^{ワタル}が白奈の意見に賛成する、

「しかしもしあの二人が一緒に暴れ出したらもつと危ないと思うが。」

「モスギスさんはんたーい！　絶対ダメダメダメです！　いいですぬ！」

無駄な逮捕したら市民とかいろいろ後味のまずい事になって……………」

それぞれ各地方のチャンピオンや四天王が意見を出し合いそして、

結果、賛成多数で再逮捕が決定した、

＊

現在、

「そんな事が・・・・・・・・・・。」

「だから、貴方は、・・・・・・・・・・逃げるべきです。」
「え。」

赤井と銀次郎がかなり驚いている、

「こういう風の吹き回しだ、さっきは逮捕するって言ってただろ。」
「赤井さん！ 逃げろ！ 俺も赤井さんが逮捕されるの嫌だぜ！」
「まあまあ、赤井さん、いったん落ち着いてください。」
「・・・・・・・・・・わかった。」

数分後、

「で、銀次郎さんが僕の護衛してくれますか？ 間違いなく狙われるので。」

「OK！ 任せろ！」

「・・・・・・・・本当にいいのか？ 後から悪者扱いするなよ？」

第4話 リーフVSカイセー 始まり編のはずだっかが……

「さあ！ カイセー、行くわよ！」
「いつでも！」

もう既に春川とカイセーとのバトルが始まっていた、

結果はカイセーの圧勝だった、

＊

リーフVSホワイト、

リーフの勝ち、

＊

モスギスが戦ってる途中、

大きな爆発とともになにか大勢の人がやって来た、

「だれだー、私の華麗で軽やかでジュエルバットな戦いを邪魔する人はー！」

モォー（p・|・q）プンポン」

さらに大きな爆発、

「キャー！ 爆発ー！？（〇ω〇）」

「何事ですか！ モスギスさん！」

リーフたちが駆け付ける、
とたんに爆発、

「………ないようだな、逃げるぞ。」

「」「」「はい！」「」「」

「まてやお前らー！」

リーフが止める、

「ん？ ……あいつはまずい、逃げる。」

「逃がすかつ！」

と言った瞬間に

「待て、やめるんだ。」

「なぜ！」

カイセーらが止める、

「ああ、俺も分からない、でもこれだけはわかる。」

「何だ。」

「あいつらは・・・・・・・・・・・・・・・・なんだ。」

「よく聞こえないな。」

「・・・・・・・・・・いつか話す！　ここでは言えない。」

カイセーは去って行った、

「おい！　待てよ！」

彼らはこれからとんでもない事件に巻き込まれるのであった・・・・・・
・・・・、

第5話 水の中に眠る炎との出会い1（前書き）

今回が極端に短いです、

ん？ いつも短いかい？ その事実是否めないな、

ははははは 、

第5話 水の中に眠る炎との出会い1

リーフは疑問を抱えたまま旅を続けることにした、次の目的地ののルネシティに向かってラティオスの波乗りで進んでいた、

注！ リーフはラティオスと会話しています

「あー、もうなんかイライラする……………」

「まあ、そうカリカリするな。」

リーフは今にも怒りだしそうな感じでラティオスはそれを止めようとしてる状態、

「……………」

そして沈黙が続く、ラティオスは流石にこの空気はやばいと思った、

「……………そうだ、ダイビングでもしねえか、気晴らしになるぜ。」

「そうだな、じゃあ頼む。」

と言ったとたんにダイビングした、

一面青の世界、海の中に住むポケモンも多くいた、

「おー！ やっぱ海の中は気持ちいな！」

リーフが機嫌を直したようでラティオスはほっと一息ついた、

「で、次どうするんだ？」

「そうだな、・・・・・・・・・・・・・・・・ん？」

「どうした。」

何もない場所にまるでポケモンが何かにぶつかってるような光景だった、

「ラティオス、弱くサイコショック撃ってみろ。」

「わかった。」

そこには潜水艦のようなものがあつた、
しかし潜水艦にしては不自然な形だった、

「なんだあれは。」

すると潜水艦のような物は動き出した、

「あ、ラティオス、ばれない程度に追いかける。」

「・・・・・・・・・・できるだけやってみる。」

ラティオスは少し不安そうだった、
実際リーフも殺気を感じていたが、

第6話 水の中に眠る炎との出会い2（前書き）

うほっ、今日は指がよく動く♪

第6話 水の中に眠る炎との出会い2

ラティオスとリーフは怪しい潜水艦をゆっくり追いかける、潜水艦の人たちは何も感じてないようだ、リーフは流石ラティオスだと思っていた、

そのまま突き進む潜水艦を追いかけているとある海底の洞窟のような場所、

海底の底に大きな穴が開いていた、近づくとかかなり温かい、ストーブの近くにでもいる気分だった、

リーフはその洞窟に入るった、すると途中でUの字に曲がり水のない洞窟に着いた、

「なんだろう、ここ、ラティオスは知ってる？」

「…………知らないな、長年この地方にいたが…………、多分ユウキもしらないだろうな。」

とりあえずリーフはラティオスをモンスターボールの中に戻して奥に進むことにした、

*

進むにつれてかなり暑くなってくる、
どこからこの暑さがきてるのだろうか、

「あちい、潜水艦に乗ってた人達はどんなってる………」

誰か数人が倒れている、
どうやらWH団？ らしい、

リーフが助けようとした時ラティオスが止めた、

「何で止めるんだよ。」
「あの時襲った奴等^{やつら}じゃないがどうも嫌な気配がする。」

リーフは少し悩んでこう言った、

「でも何もしたくない人はほっておけないよ。」
「けっ、ヒーローみたいな事いいやがって、後で俺が苦勞するぜ。」

そうラティオスは倒れてた数人を乗せて入口に向かった、

「ふう、俺は奥に進むか。」

第6話 水の中に眠る炎との出会い2（後書き）

水の中に眠る炎との出会い編は結構文字数が少ないと思います、
長けりゃいいってもんでもないですけど・・・・・・

第7話 水の中に眠る炎との出会い3 (前書き)

この編は1話1話が極短に短いな、まあいいや (汗

第7話 水の中に眠る炎との出会い3

「うっ、暑い、暑すぎる。」

もうここまで来ると灼熱地獄のように熱い、
周りの土の色もさきほどまでは若干青かったものの進むにつれて赤
くなってきている、

スペース的にもパルキアは出れないために他水技を使えるポケモン
はいまのところいない、

＊

さらに奥に進んだ、
相当な熱気が立ち込める、
流石のリーフも意識がもうろうになってきた、

途中で二手の道に分かれていてリーフは迷わず左の道を選んだ、
理由は悩んでるとこのまま死ぬと思ったのだろう、
彼は気になると最後までとことんするタイプである、

＊

心配になったジャノビーはモンスターボールから出てきた、
………ん？ いまだにジャノビー？

5年も経って？

まあ、それはともかく、

「ありがとう、でも俺は何と無く奥に進まないといけない気がするんだ。」

「ジャノ！」

どうやらジャノビーは何かを見つけたようだ、

「なんだこれ、……………まるでエンジン？　かな、まあ、もれつとくよ。」

「ジャノ♪」

ジャノビーは嬉しそうに歩いている、
この暑さが平気なのだろうか？

彼らはさらに奥に進む……………

第7話 水の中に眠る炎との出会い3（後書き）

なんで未だにジャノビーかって？
これが『絆』ですよ、

第8話 水の中に眠る炎との出会い4

リーフはさらに進みついに洞窟の奥地に着いた、
しかし異様な暑さである、リーフは今にも倒れそうだった、

部屋の真ん中に白く綺麗な石があった、

「お、・・・・・・・・俺、ここで・・・・・・・・死ぬのか・・・・・・・・な、
ははは。」

普通の人間ならもう既に死んでいる、
なぜ生きているかというと原因は全てウォーグルにある、
ウォーグルとのトレーニングに付き合ってる内に異常なスタミナが
ついてしまったようである、

つまりそこまで暑いということである、

「だめだ・・・・・・・・意識が・・・・・・・・。」

そう言った時どこからか声が、

「ううう、・・・・・・・・何で生きてるんだよお、この人普通じゃない
よお。」

どこか寂しげな声、発言はまるで生き物を避けてるような発言だった、

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、俺は普通じゃない、少なくともな。」
「とりあえずここにいたら死んじゃうよ?」

謎の声がリーフに忠告する、

「……だめだ、そんな気がする。」

「うう、速く出てってよ!!!」

その時謎の声の主が現れる、

「お前は……、レシラム……。」

「そう、僕はレシラム、……だよ。」

レシラムはもじもじしながら言う、

リーフの体力はもう限界に近い、

「あ、……だめ……だ……。」

リーフがボタンと倒れる、

「……もう。」

第9話 水の中に眠る炎との出会い5 (前書き)

今回も短い、ごめんね

第9話 水の中に眠る炎との出会い5

「おらぁ！ 起きろ！」

ラティオスが叫びながらリーフを殴る、

「ぐほっ、何か久しぶりだな……殴られて起こされるの。」

「何だ、怒らないのか、予想外だ。」

「まあ、で、ここどこなんだよ。」

「アルマトーレだ。」

「ふーん、……あ！ レシラムは！？」

そう言って後ろを振り返るとそこにはレシラムの姿があった、

「どうやらお前を連れてきたようだが……何かあったのか？」

「まあ、長くなるぞ？」

「構わん。」

＊

「ということなんだ。」

「ふーん。」

きずくと周りに人が集まっている、

「うわっ、どうしよう。」

「えーっと、僕……。」

「ん？ どうした？ レシラム。」

「仲間に……なりたいんだけど。」

「もちろんいいぜ！」

リーフはレシラムにモンスターボールを投げてゲットした、

お知らせ

杏

「お知らせです！」

リーフ

「ああ、テストね。」

杏

「うん、だからしばらく更新できません、来週あたりからまた毎日更新します。」

リーフ

「……………もう終わるかよ！」

杏

「さあ、どうやって200文字まで引っ張るか……………」

リーフ

「……………」

杏

「……………」

リーフ

「……………」

杏

「……………」

リーフ

「……………いいのかよ！ そんな引っ張りかたで！」

杏

「だってえー、何もすることないもん。」

リーフ

「はあ、そろそろ200文字かな、ではまた会いましょう。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0009y/>

俺の彼女はポケモン

2011年11月24日18時45分発行